熊野の森から

怪しの熊野

其の四十七

「那智勝浦の怪異（その2）」

和歌山大学
システム工学部
環境システム学科
中島敦司教授

熊野信仰では、人が亡くなると幽魂は妙法山に参り、阿弥陀寺山門の傍にある「ひとつ鐘」という釣鐘をついてからあの世に旅立って行くといわれている。阿弥陀寺から本宮へと続く大雲取越え、小雲取越えの道は死出の山路とも呼ばれ、その道中には「亡者の出会い」と名付けられた場所もあり、道行く人は亡くなった肉親や知人の霊に出遭うことがあるという。その亡者達は、恐ろしいモノというよりは、むしろ成仏に向けての道中にあり、この世とあの世の境界が那智山やその周辺に存在するということになろう。

大雲取越え、小雲取越えの道中や周辺の山中に出没する「ダル」。姿は見えないという。ガキ（餓鬼）とも呼ばれ、取り憑かれると激しい空腹感に襲われ、ひどい場合はその場で行き倒れてしまう。（イラストはＢｏＢｏ）

大雲取越え、小雲取越えの道中や周辺の山中には「ダル」が出没するという。ダルはガキ（餓鬼）とも呼ばれ、取り憑かれると激しい空腹感に襲われ、ひどい場合はその場で行き倒れてしまう。ダルは、山で飢えて死んだ人が悪霊となったもので、ダルに憑かれないためには食べ物を持ってから山に入ると良いとされる。取り憑かれた際には、持っている食べ物を食べるとダルは退散する。このため、お弁当などを食べる場合、米粒ひとつは残しておくと良い。食べ物が無い場合は、手のひらに米と字を書いて飲み込むようにする。現代でもダルに出遭う人がいて、例えば、数年前に湯川の奥で憑かれたという人の話を地元で聞いたことがある。那智川の支流の奥で山仕事の最中にダルに憑かれた経験を持つ人に出会ったこともある。ダルとの関わりは不明だが、平家の落人、南北朝争いの落ち武者の亡者が山中をうろついているという話もある。色川の山中ではキツネに化かされることもあり、キツネに化かされた人が田垣内で目撃されている。霊山の那智山でも、神域を離れるとさまざまな怪異が潜んでいるものだ。

下里に出没した「桂男」。満月の中に潜み，絶世の美男子の姿で女性を幻惑して招くという。（イラストはBoBo）

那智勝浦の海沿いでは、下里に出没した「桂男」が特徴的だ。満月の中に潜み、絶世の美男子の姿で女性を幻惑して招く。日本では月の中には餅をつくウサギが棲むといわれることが多いが、中国では桂男が住むといわれる。外国の伝承の類話があることから、海沿いの地域が海外に開かれていたことをイメージさせる。なお、那智勝浦の海沿いでは、目立った怪異の話が特には残されていないことは興味深いことだ。

中島敦司（なかしま・あつし）教授プロフィール

昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗（妖怪、伝承）。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30～50日は訪問し、研究する。